

## —第45編— グラナダ<sup>\*1</sup>という「世界遺産」

アルハンブラ<sup>\*2</sup>を狙った画像は数知れないが、それを支える市街地に関するものは少ない。駅から急坂の丘を超えると斜面に展開する高密度な街が待っている。かつての住居がホテルにコンバージョンされた例も数知れないが、友人が選んでくれた小さなホテルでは天幕で覆われたパティオを中心に客室が立体的に巡る。その窓から見上げるアルハンブラは格別であった。その詳細をここで繰り返すまでもないだろう。いずれにしても、アラブ建築の魅力にとりつかれてきた私は、いつかは来ようと思心決めていた。そして、その魅力を堪能するには余りある圧倒的な宮殿建築であった。



写真45-2 ホテルのパティオ

1534年、イスラム勢力の最後の砦であったこの地をレコンキスタ<sup>\*3</sup>の一環としてキリスト教徒の手に奪還したのはカルロス一世<sup>\*4</sup>であった。最愛の王妃イサ



写真45-1 アルハンブラから見下ろすグラナダ市街地

\*1  
Granada: アンドルシア州グラナダ県の県都。人口約24万

\*2  
Alhambra: 9世紀からグラナダ南東の丘の上に漸次建造された城塞・宮殿

\*3  
Reconquista: 718~1492にキリスト教国によって行われた、イベリア半島のイスラム勢力からの再征服活動の総称

\*4  
Kar V/Carlos I (1500~1558)  
ハプスブルグ家出身の神聖ローマ帝国皇帝、およびスペイン国王

\*5  
Isabel de Portugal (1503~1533)

ベル<sup>\*5</sup>が敵の文化を破壊せずに守り通した理由を、宮殿の至る所で十分に理解するとともに、その決断にただ感謝するしかなかった。時を超えて建築がここまで人を感動させることができる。イスラム文化が創造しためくるめく光、影、空間、装飾の連続に身を置きながら、そのことに心底驚かされた。丘の上に聳えるこの希有な「世界遺産」の内実を一旦知れば、それを谷合から見上げるとき、街角の狭間から垣間見るとき、グラナダのまちはいっそう特別な輝きを増すのである。



写真45-3 アルハンブラ内部の一角

こうして旧市街地の狭い坂道を何度も上り下りしつつ丘の上のまちを巡りながら、かつて祖父が1930年代に訪れ魅せられた(第94編参照)イスラムとスペインシユのハイブリッド文化に、私の血が騒いだことは言うまでもない。



写真45-4 天井のムカルナス(鍾乳石飾り)



写真45-5 アラヤネスのパティオ